
野菜王子リリカルベジータ

losepact

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

野菜王子リリカルベジータ

【Nコード】

N2107N

【作者名】

l o s e p a c t

【あらすじ】

これはドラゴンボールでお馴染みのベジータが、魔法少女リリカルなのはの世界に迷い込んでしまうお話です。

さて、ベジータはどうなってしまうのか…

ちなみに、モバゲータウンに違うタイトルで内容が同じ小説があります。うp主は同一人物です。

ブローグ

「くそっ、何故俺がこんなことを…」

不機嫌な様子のベジータはキャベツ片手に自宅に向かっていた。

「ブルマめ…わざわざカカロットの家の畑まで行かせるとは……なっ！？」

ふと前を見ると、竜巻がこちらへ向かってきていた。

「あの竜巻……物凄いスピードで向かってきやがるだと!？」

そう、竜巻はあっという間にベジータの前までやってきて、ベジータを完全に吸い込んでしまった。

「ぐわっ！くそっ、くそったれ!……うわぁっ!？」

ここで完全にベジータの意識は吹き飛んだ。

*

―海鳴市

「じゃあまたねー!」

校門前で、アリサとすずかの二人と別れる少女、高町なのは。

そんな彼女は帰り道にて、あるものを見つけた。

「…え…ええええ！？」

なんとそれは、先ほど竜巻によって吹き飛ばされたベジータだった。

しかも道のど真ん中に倒れている。

「だ、大丈夫ですか！？」

だが意外にもベジータはすぐに意識を取り戻した。

「…ん？…ここはどこだ…？」

そう呟いたベジータは横にいるのはに気づき、目を向ける。

「おい貴様、西の都はどっちだ？」

「西…の都…？…街ですか？」

「知らんのか…じゃあここは何処だ？」

「ここは海鳴市です」

「なんだとおッ！？」

出会い

とりあえず、なのはに拾われたベジータは土郎の計らいで、喫茶店“翠屋”で働くこととなった。

「ふふ…よく来たな。何名様だ？」

「……」

「貴様！何名様だと訊いているだろうが！さっさと言いやがれ！！」

「ひ…一人です…」

「そうか、まあいい。空いている席に座れ」

そのサラリーマン風の客はベジータにビビりつつも、カウンター席に座った。

「ベジータさん……もっと笑顔、そして丁寧な接客お願いしますよ」

なのはの父であり、翠屋のマスターでもある高町土郎が顔をしかめる。

「これでも駄目か？」

「あゝ…じゃあ店の前の掃除をお願いします」

半ば呆れた土郎は、ベジータにほうきとちりとりを手渡した。

*

「ふん、こんなもの必要ない」

店の外に出たベジータは、ほつきとちりとりを放り投げ、近くの落ち葉に対して……

「ビッグバンアタック!!」

ドオオオオ!!

当然ながら、落ち葉の他に植木や花壇までも吹き飛ばしてしまった。幸い、店の前には誰もいなかったが、これが原因でベジータはクビになり、翠屋を追い出されてしまった。

*

「くそっ、くそったれ……」

翠屋を追い出されたベジータは途方に暮れていた。

所持品はキャベツとスカウターのみ、住むところなどない今の彼はホームレス状態だ。

だが…

「あゝあ、キャベツ売り切れてたなあ…」

「残念ですね…」

突如ベジータの後ろを、車椅子に座った少女と、それを押す金髪の女性が通りかかった。

どうやらキャベツが買えなかったらしい。

（もうどうでもいい…）

半ば自棄になったベジータは二人の方へ歩き出した。

「？」

「な、何か？」

「使え。俺には必要ないからな」

そう言い、金髪の女性…シャマルにキャベツを渡すベジータ。

車椅子に座っている少女…はやてとシャマルは当然ながら驚く。

「い…いいんですか？」

「言っただろう。俺には必要ないとな…フッ、邪魔したな」

そう言い、ベジータが立ち去ろうとした時だった。

「待って！誰か知らんけど、ありがとうございます！よかったら家に来ます？」

「…！…いいのか…？」

「だって、買いそびれたキャベツくれたんやし…なんかお礼せなあかんやん？な、シャマル」

「はい！」

こうしてベジータは八神家に向かうこととなった。

王子と守護騎士達

「ふうん、ベジータっていうんや。私ははやて。よろしくな」

さっそく自己紹介するはやて。

「ああ…すまん、いきなり押し掛けて…」

「何言つてんの、賑やかな方が楽しいやん」

「はやて、そんなMハゲで青タイトのオッサンのどこがいいんだよ？」

赤髪の少女…ヴィータが口を開いた。

「こ…このクソガキめえッ!!」

流石にカチンときたらしい。

ベジータとヴィータは立ち上がり、睨み合う。

「ああ!?!やんのか!?!」

「いいだろう!この超エリートのパワーを見せてやろう!」

二人が表に出ようとした時だった。

「二人とも、やめないか」

睨み合う二人の間に割って入るポニーテールの女性…シグナム。

「ヴィータ、今のはお前が悪い。彼に謝れ」

「そうやでヴィータ、ごめんなさいは？」

はやてとシグナムの二人から言い寄られ、ヴィータは渋々とベジータの方を向いた。

「う…ごめんなさい、オッサン…」

「ふん、別にかまわん」

なんとか和解したと同時にザフィーラも帰ってきた。

「ん？なんだこのデカイ犬は？」

「我はザフィーラ。貴様は何者だ？」

「なにイ！？犬が喋っただとおッ！？」

ベジータはザフィーラが喋ったことに驚き、ザフィーラはベジータを不審者を見るような目で見ている。

当然といえば当然かもしれないが。

「この人はベジータ。キャベツ買われへんかった私らにキャベツくれたんよ！」

笑顔で話すはやて。

よほど嬉しかったのだろう。

「そうですか……感謝するぞ、ベジータとやら」

そう言ったザフィーラは人間の姿を見せた。

「へ…変身できるのか…」

ベジータは内心、こいつフリーザみたいな奴だな、と思っていた。

「ところではやて、何故そんなにキャベツが欲しかったのだ？」

「お好み焼き作ろうと思ってたんよ！」

それを聞いたベジータの目の色が変わった。

「お好み焼きだと？なら俺様に任せる！」

*

「さあてめえら！覚悟しやがれ！このベジータ様がたつぷりと料理してやるぜー！」

早速キッチンに移動したベジータは、はやてにあげたキャベツを手にとった。

「まずはキャベツだ！みじん切り！こっぴ微塵にしてやるぜー！」

（長いので省略します）

*

なんやかんやあり、ベジータはお好み焼きを完成させた。

しかもそれは意外に好評であり、特にはやてとヴィータは笑顔を見せていた。

「ベジータ！美味しいよ！」

「オッサンやるなあ！ギガ美味いぜ！」

「ふん、別に大したことじゃない…」

そう言い、顔を背けるベジータだが、そんな彼の顔をヴィータが覗き込んでいた。

「…なんだ？」

「そ…その…さっきはあんなひどいこと言って…ごめんなさい…」

「そんな小さなこと、王子の俺が気にするはずがないだろう。さっさと食え」

*

それからベジータの、八神家の一員としての生活が始まった。

「ちょっと修行してくるぞ」

「ああ、待てベジータ」

家を出ようとしたベジータをシグナムとザフィーラが引き止める。

「なんだ？」

「修行なら、私達も混ぜてくれないか？」

「ああ、大勢の方が上達も早いからな」

「いいだろう。この俺様のパワーを見せてやる！」

シグナムやザフィーラと一緒に修行したり…

*

「おい、帰ったぞ！」

二人との修行を終え、帰宅したベジータをはやてとヴィータが迎える。

「おかえり、汗びっしょりやね」

「おかえりベジータ」

「ほれ、アイス買ってきてやったぞ！」

ベジータはヴィータにビニール袋を手渡す。

「やった！サンキュー、ベジータ！」

「よかったなあ、ヴィータ」

「はやて、お前の分もあるぞ。ヴィータ、早く冷蔵庫に入れてこい」

「ふふっ、ありがとうな。ベジータ」

はやてとヴィータにアイスを買ってやつたり…

*

二人との修行を終えたベジータは、歩いて家へ向かっていた。

（シグナムの奴…気迫が尋常じゃな……ん、あれはシャルルか？）

ふと前を見ると、買い物袋をさげたシャルルが歩いていた。

だが買い物袋が重いのか、シャルルの歩く速度が遅い。

「おいシャルル！」

ベジータはシャルルに駆け寄る。

「…ベジータさん、どうしてここに…？」

「修行の帰りだ。それより、そいつは重いのか？」

「ええ、ちよつと…重いですが、なんとか…え？」

黙ってシャルルの持っていた買い物袋を持つベジータ。

「俺が持つてやる」

「あ…ありがとうございます！」

「勘違いするな、筋力トレーニングのひとつだ」

シャルルの荷物を持つてやったり…

この5日間でベジータは八神家にだいぶ馴染んできた。

*

時を同じくして、時空管理局のアースラでは…

「艦長、あのベジータという男…魔導師なんですかね？」

「さあ…そうだわクロノ。はやてさん達に伝えて。明日、そのベジータさんをアースラに招待してって！」

なんと時空管理局がベジータに目をつけたのだった。

時空管理局

翌日、ベジータはシグナムに連れられ、アースラに来ていた。

「何故俺がこんな所に連れて来られねばなんのだ!？」

「リンディ提督からお話があるそうだ。くれぐれも失礼のないようにな」

二人が廊下を歩いていると、クロノと出くわした。

「やあシグナム。彼が？」

クロノがベジータの方を向く。

「はい、クロノ執務官。彼がベジータです」

「……」

クロノは、青タイツを着てふんぞり返っているMハゲのおっさんを見て半ば呆れているようだ。

「と……とにかく来てくれ。艦長は応接室にいるから」

そう言い、クロノはベジータを連れて応接室へと向かっていった。

そうこうしているうちに、二人は応接室前に到着した。

「失礼します」

シュン！

二人はリンディの待っていた応接室へと足を踏み入れた。

「初めましてベジータさん。私はこのアースラの艦長、リンディ・ハラウンです」

「俺はベジータだ」

簡単に自己紹介を済ませ、椅子に座るリンディとベジータ。

「早速ですが、貴方の出身世界はどちら？」

「惑星ベジータだ」

*

ちなみに応接室とアースラの艦橋は交信可能なため、艦橋にいるスタッフの耳にも会話の内容は届いている。

ベジータの話を聞きながらキーボードを叩く少女、エイミー・リミエッタ。

「艦長！惑星ベジータなんて星は存在しませんよ！」

*

「当たり前だ！その星は数十年前、フリーザによって消されたのだ

「からな！」

エイミーの報告を聞き、怒鳴るベジータ。

（フリーザ……冷蔵庫？）

さっそく話がそれてしまった。

「え……ではベジータさん、現在お住まいの世界は？」

リンディが上手く話をもとに戻した。

「地球だ。地球の、西の都のカプセルコーポレーションだ」

「あら、なのはさんと同じ世界に住んでいらっしゃるのね！」

《ええと……艦長！西の都って街も、カプセルなんとかっていう施設も見つかりません！》

「なんだとおッ！？そんなはずはない！もっとよく探せ！！」

エイミーの報告に、今度はうるたえるベジータ。

そしてリンディは真剣な表情でベジータの目を見つめ、一つの可能性を口にした。

「……もしかしてベジータさん。貴方、次元漂流者では……？」

「……次元漂流者？なんだそれは？」

「パラレルワールド…つまり別世界に迷い込んでしまった者を指す用語さ」

説明するクロノ。

「ふ、ふざけやがって…おい！俺を元の世界に戻す方法はないのか！？」

するとリンディはため息をつき、俯いた。

「残念ですが…現在のところは…」

「く…くそつたれえ……」

「ですが、ご安心ください。管理局が全力で調査しますから！」

《そうですね。管理局の調査員の腕、ナメてもらっちゃ困りますな
〜！》

場を和ませようとしたのか、エイミィが軽い口調で言う。

「そうか…すまん、貴様ら…」

「いえ。ということではジータさん。元の世界に戻るまでの間、管理局に力を貸してほしいんです。よろしいですか？」

「別にかまわんが、どうすればいいんだ？」

「まずは、なのはさんとフェイトさんの二人と戦ってみてください。貴方の力はシグナムから聞いています」

いつ来たのか、なのはとフェイトの二人がクロノの横に立っていた。

「あ、あなたは…！」

ベジータの姿を目の当たりにし、驚くのは。

「ほう、こないだのガキか」

ベジータもなのはのことを思い出したようだ。

「なのは、知ってるの？」

「うん。前、学校の帰りに道で倒れてた人なの。それでお父さんが翠屋で雇ってたんだけど…」

「うつ……」

後ろめたく感じているのか、顔を背けるベジータ。

「まあ細かいお話は後にして、トレーニングルームに行ってくださいるかしら？ 結界を張っているから、どんな攻撃でも大丈夫ですよ」

こうして五人はトレーニングルームまで移動した。

ベジータvsなのは&フェイト

10分後、トレーニングルームには変身した二人とベジータ、リンディを始めとする観戦者達が集結していた。

ちなみにリンディ、クロノ、エイミィ、ユーノ、アルフ、シグナムだ。

というかエイミィ、仕事はどうした？

「フン……」

スカウターを装着したベジータは二人の戦闘力を測っていた。

（なのはの戦闘力は22000…あの金髪のカキは21900か…
…ただの子供にしては上出来だな）

ちなみにこのスカウターはブルマによって改良されたものであり、数値をどこまでも測ることができる。

「それでは開始！」

クロノが模擬戦開始の宣言をした。

「えいッ！」

「はぁッ！」

先に動いたのは、なのはとフェイトだった。

二人はデバイスで殴りかかるが、ベジータに当たることはなかった。

シュン！

「き、消えた！？」

「ど…どこなの！？」

二人は辺りを見回し、必死でベジータを捜すが、ベジータの姿は見当たらない。

それもそのはず、ベジータはトレーニングルーム内を高速で移動しているのだ。

「ギャリック砲ー！！」

なんと二人の後ろからギャリック砲が放たれ、なのはとフェイトの間を駆け抜けていった。

（は、速い！見えなかった…！）

（ベジータさん…とっても強いのに！）

ベジータの実力を目の当たりにした二人。

想像以上に強いため、恐怖で身体が動かない。

「今だ！ダブルギャリック砲！！」

ドオオオオオ！！

二人の正面に姿を現したベジータは両腕を広げ、ギャリック砲を放った。

ドガアアアン！！

「なのは！フェイト！」

アルフは叫ぶと同時にベジータの方へ走っていき、彼の胸倉を掴んだ。

「よくも二人を…！」

「待つてアルフ！二人は無傷だ！」

煙が晴れてくる。

ユーノの言葉通り、傷一つない二人が床にへたり込んだ状態で現れた。

「…あれ？どこも痛くない…！」

「ほんとだ…怪我してない！」

なのはとフェイトが無傷であることに驚く観戦者達。

「す、凄い力……ベジータさん、もしかしてわざと攻撃を外したのかしら……？」

「いえ、確かにベジータはあの二人に技を直撃させました」

だが、ベジータの技を注意深く見ていたシグナムだけは違った。

彼女は何度かベジータと共に修行しているため、彼の癖などを見抜いていたのだ。

「私にはわかったぞベジータ。お前はその技を放った際、威力を最小限に抑えたのだろう？二人を傷つけないために」

シグナムがベジータに言い放つ。

「……え？そうだったの……！？……ごめん……」

慌ててベジータから手を放すアルフ。

「当たり前だ！俺が弱い者イジメなどするはずがないだろう！」

やがてなのはとフェイトは立ち上がり、埃を払うとベジータの方へと歩き出した。

そしてベジータの前で立ち止まり、言った。

「ありがとう。ベジータってとても強いんだね」

「それに優しいんですね、ありがとうございます!」

二人は頬を紅潮させ、微笑んだ。

「ふ、ふん!勘違いするな!別にお前達のためなんかじゃない!ガキを痛めつけたら俺様が悪者だからな!」

ぶいっとな顔を背けるベジータの頬は赤く染まっていた。

「相変わらず素直じゃないな」

「う、うるさいぞシグナム!…リンディ、これでいいのか?」

「はい!ベジータさん。本日より、貴方をアースラ所属の管理局員として保護します!」

こうしてベジータはリンディの計らいにより、時空管理局に身を寄せることとなった。

——証明書——

n a m e ベジータ

h o m e 現地惑星名称「惑星ベジータ」

j o b 時空管理局 アースラ所属 訓練生

M a g i 魔導師ランク《なし》

まさかのアイツ登場！？（前書き）

感想や意見、アドバイス待ってます！

まさかのアイツ登場！？

あれから一週間後、ベジータは管理局に身を寄せながら八神家で暮らしていた。

だがそんな中、小さな事件が発生した。

*

「ベジータの奴どこ行っちまったんだ？」

空を飛びながらベジータを捜す、橙色の胴着を着た男。

紛れもなく孫悟空である。

実はベジータが消息を絶ってから、ブルマに頼まれた彼はベジータを捜し、世界中を飛び回っていた。

「やつべえ、オラ腹減っちまった！お、あそこに喫茶店があつぞ！ちよっくら行ってみつかあ！」

喫茶店を見つけた悟空は地上に降り、その店に入っていた。

店の名は“翠屋”。

この時、悟空は気づいていなかった。

自分もベジータと同様、海鳴市に迷い込んだという事実…。

「いらっしやませー！」

なのはは店の手伝いをしていた。

「おう、わりいんだけど食い物沢山持ってきてくれ」

（…沢山？沢山って何を、どの位！？）

すっかり困り果てたなのはは、皿洗いをしている桃子に助けを求めた。

「お母さん。あの人、食べ物沢山だって」

桃子は皿洗いを中断し、悟空の座っているテーブルへと足を運んだ。

「あの…メニューの種類は沢山ありますが…？」

「何でもいいよ。とりあえず50人前持ってきてくれ」

悟空の発言を聞いた桃子となのはは驚いた。

50人前食う人間なんてテレビ以外で見たことがないからだ。

10分後、

「いやゝ食った食った！チチの料理と同じくらい美味かったぞゝ！
サンキューな！」

「あのゝ…そろそろお支払いを…」

支払いと聞き、悟空は重大な事実に気づいた。

「…！…しまったあ、オラ金ねえんだった…」

なんと悟空は所持金0円だった。

またもこの男に驚かされる桃子となのは。

「えっ？…でしたら住所とか教えてください。お支払いはまた今度
で構いませんから…」

*

視点をベジータに移してみよう。

「へっ！ようやく金が入ったぜ！」

空を飛び、何処かへ向かっているベジータ。

「ん？あの屋根は…ほう、なのはの翠屋か！」

とりあえずベジータは着地し、店内を覗く。

「……！？」

店内を覗いていると、見覚えのある人物を見つけた。

「カ…カカロットか…!？」

*

視点をなのは達に戻そう。

「ところでおめえ、なんて名前だ？」

「私、なのは！高町なのは！」

なのはから名前を聞いた悟空は桃子の方を向く。

「なあ、なのはの母ちゃん。オラに仕事くれねえか？美味しい飯食わしてもらったし、ちゃんと金返さねえとな」

その時、翠屋のドアが開いた。

「カカロット、何故お前がここに？」

入ってきたのはベジータだった。

「ベジータさん！」

「おうベジータ！おめえこんなところにいたんか！」

「ベジータさん、このお兄さんとお知り合いなんですか？」

なのはがベジータに尋ねる。

「おう、オラ孫悟空ってんだ。よろしくな、なのは！」

「悟空さんですね。よろしく願いします！」

二人が握手を交わす。

「でもベジータさん、さっき悟空さんのことカカロットって…」

「ああ、話せば長くなるんだがな」

そう言い、ベジータはサイヤ人の歴史を語り始めた。

フリーザの裏切り、ドラゴンボールのこと、悟空との死闘、ナメツク星での激闘などだ。

「…つまりサイヤ人名がカカロットなんですね？」

「ああ」

「お二人とも、最初は敵同士だったのに今は仲間なんですね！」

「おう！」

（なんか、私とフェイトちゃんみたいだな…）

「話を戻すがカカロット、何故お前がここに？」

本題を思い出し、改めて悟空に尋ねるベジータ。

「それだ。ブルマに頼まれておめえを捜してたんだけどよ、そこで腹減っちゃったからここに来たんだ」

「なるほど…お前も俺と同じか…」

ため息をつくベジータ。

「ベジータと同じ？どういう事だ？」

「いいか、よく聞けカカロット。俺達は…別の世界に迷い込んでしまったんだ」

「……いい！？そうなんか！？どつりであ、ブルマン家の商品がねえはずだ」

悟空も驚いているようだが、ベジータほど落ち込んではいないようだ。

「とにかく今はこの海鳴市で暮らすしか選択肢はない。それに管理局が俺達の世界に帰れる方法を模索してくれているから、お前もリンディのところへ挨拶に行くんだな」

ベジータがそう言った時、翠屋のドアが開き、フェイトとアリサ、すずかの三人がやってきた。

「遊びにきたよ！…って…」

三人、特にアリサとすずかは、ベジータと悟空の姿を見てキョトンとしていた。

「この人は孫悟空さんで、青い服の人はベジータさんだよ！」

なのはは三人に悟空を紹介する。

「おう、よろしくな！おめえら、なのはの友達か。かわいいな、チチの子供ん頃みてえだぞ」

そう言った悟空はフェイトに目をやる。

「おめえスーパーサイヤ人みてえだな。金色のオーラが出てっぞ！」

悟空の言っていることが理解できず、フェイトは首を傾げる。

「あまり真剣に受け止めるな」

ベジータはフェイトにそう耳打ちした。

「そついやベジータこそ、なんでここにいるんだ？」

「おっと、すっかり忘れるところだったぜ」

そう呟いたベジータはポケットから封筒を取り出し、桃子に手渡した。

「これは？」

「……こないだ壊した植木や花壇の修理代だ」

「わざわざ持ってきてくれたんですか!？」

「迷惑をかけてしまったからな。これくらい当たり前だ」

高町家がベジータを見直した瞬間だった。

「お金持ちのあたしが言うのもあれだけど…そんな大金どうしたの？」

アリサがベジータに尋ねる。

「そいつは質屋にスカウターを売った際、手に入れたものだ」

「すかうたー…って？」

ポカンとするのは。

「ほら、こないだ私達がベジータと戦った時、ベジータが目につけてた機械じゃないかな？」

「そうだ」

ベジータはいつものように腕を組み、頷く。

「あの…もしかしてあなたが、はやてちゃんの言ってたベジータさん？」

その時、今まで黙っていたさすが口を開いた。

「そうだが、貴様はやての知り合いなのか？」

「はい。嬉しそうに話してました。お父さんができたみたいだって」

「そうか…はやての奴そんなことを…」

*

ベジータ達とは別に、悟空は桃子と話していた。

「なあ桃子さん。そろそろオラに仕事くれねえか？やっぱちゃんと金返さねえと」

「ええ。何なら住み込みで働いてください！」

こうして悟空は高町家で暮らすことが決めた。

まさかのアイツ登場！？（後書き）

次回から事件の影がちらほらと見えてきます

謎の事件（前書き）

ここから若干シリアスになっていきます

謎の事件

悟空が来てから一週間後、

アースラのエイミーは何かに気づいたようだ。

「艦長！海鳴市全域にて、闇の書の反応を感知しました！それと、謎の反応を多数感知しました！」

エイミーの報告を聞き、リンディは驚く。

「どういう事！？闇の書事件は半年前に解決したはず…」

*

「はぁッ！」

「うぉッ！」

八神家の近所の空き地にて、ベジータはシグナムとザフィーラの二人を同時に相手していた。

ちなみにはやて、ヴィータ、シャマルもいる。

「でやッ！」

二人の攻撃を簡単に受け止めるベジータ。

「はぁー！ー！！」

ドシュン！

ベジータは気を開放し、二人を吹き飛ばした。

「…またやられてしまったか…」

「ああ、流石はベジータだ」

「そう言う貴様らも戦闘力をだいぶ上げたじゃないか」

そう言ったベジータは予備のスカウターを装着し、二人の戦闘力数を測定した。

…ピピピッ！

「シグナムは34000、ザフィーラは33900だな…ん？」

何かに気づいたベジータ。

「どうしたのだ？」

「お前、怪我してるな」

見るとシグナムの膝から血が少し流れていた。

「ああ、このくらい大丈夫だ」

「馬鹿野郎！シャマル！消毒液を出せ！細菌が入っても知らんぞお

ッ！！」

「そうやでシグナム、お父さんの言うことは聞かなあかんよ」

「はい、主はやて」

「だ、誰がお父さんだ！？」

顔を赤くするベジータと、それを見て笑うはやて達。

「あんたやてベジータ！ほんまかわいいな〜！」

「く…くそつたれー！ー！！」

ベジータがはやて達と過ごしている頃、海鳴市の漁港にて異変が起こっていた。

ピピピッ！

《ベジータさん！リンディです！》

ベジータの装着していたスカウターに通信が入った。

ちなみにスカウターは通信機としても利用できるのだ。

「なんだ？」

《海鳴市の漁港にて、異変が発生しています。直ちに向かってくだ

さい！大きな反応が一つです！》

「わかった！」

リンディとの交信を終え、ベジータははやて達の方を向いた。

「急用が入った。ちょっと行ってくるぞ」

ドシュン！

ベジータは気を開放すると飛び去っていった。

*

漁港では謎の爆発により、全ての船が大破していた。

「こ…これは…はっ！この気は…！」

ベジータは何者かの気を感じ取ったようだ。

「あいつは…！」

ベジータの視線の先には、どう見ても地球人には見えない紫色の肌の人物がいた。

「…ん？」

その人物もベジータに気づいたようだ。

「ぬわぁっ！？ベジータ！！何故貴様がここに！？」

だがひどく驚いている。

「それはこっちの台詞だ！何故貴様が生きているんだ、キュイ！！」
なんとそこにいたのはかつてのライバル、キュイだった（ナメツク星編参照）。

「とある科学者のおかげだよ！だから久々に暴れてるんだぜえ！！」

そう叫んだキュイはエネルギー弾を放ち、港のクレーンを破壊した。

「チツ、薄汚ねえ野郎だ！ぶっ殺してやる！！」

ドシュン！

怒ったベジータは気を開放し、キュイに殴りかかった。

だがキュイはベジータの拳を軽々と避けた。

（こいつ…どこかパワーアップしてやがる！）

これでベジータはキュイのパワーアップを確信した。

「貴様、どうやったかは知らんが、戦闘力をだいぶ上げたじゃないか！」

「簡単なことよ！ベジータ、半年前にこの街で起きた事件を知ってるか？」

「闇の書事件だな？シグナム達から聞いたぞ！」

「闇の書は完全に消滅したかに見えたが、実はまだ無数の欠片が漂ってるんだ。そいつを吸収したら、めちゃくちゃパワーアップしてよ！ガハハハハ！もう貴様はおしまいだ！！！」

ズキュン！

高笑いをあげたキュイはベジータにエネルギー弾を乱射する。

ベジータは避けることもせず、攻撃を受け止めていたが…

「ビッグバンアターック！！！」

ドオオオオ！！

ビッグバンアタックはキュイに直撃した。

「ぐわああああ！！！」

ドガアアアン！！

「へっ、相変わらず汚ねえ花火だぜ！」

キュイを消し去ったベジータはそう吐き捨て、スカウターでアースラに連絡をとった。

「…おいリンディ、お前曰く大きな反応とやらを消したぞ」

《はい、確認しています。ご苦労様でした》

「今俺が消した奴だが、俺のいた世界にいた奴だぞ。それもかつて俺が、どんな願いでも叶うドラゴンボールを探している際に殺した奴だ。闇の欠片を吸収したとかほざいてやがったぜ」

《なんですって？やっぱり闇の欠片は漂って……ありがとございますベジータさん。報告はまた後ほど》

通信は終わり、ベジータははやて達の所へ戻った。

*

同時刻、海鳴市某所にて

「…ふふ、聞かせてもらったわ。そのドラゴンボールのこと…」

スカウターを装着し、黒い衣装の女性が薄ら笑いを浮かべている。

「…生き返ってすぐ質屋に化けて海鳴市に潜んでいた甲斐があったわ…もうすぐよアリシア、生き返らせてあげるからね…」

蘇る死人達

その夜、八神家にて

「そうか、かつてお前が倒した敵が何故かこの世界にいたのか…」

「ああ」

帰宅後、ベジータは今日の出来事を守護騎士達に話した。

「とにかく用心するに越したことはない。俺が居なくても各自の修行や訓練は怠るんじゃないぞ！」

*

翌日、翠屋では悟空がせつせと働いていた。

「おう、いらっしやい！」

接客に関してはベジータより愛想がよかったため、士郎が採用したのだった。

もしチチがいたら泣いて感激するだろう。

「悟空さん、ちょっといいかしら？」

カウンターで桃子が手招きしている。

「どうしたんだ桃子さん？」

「申し訳ないんだけど、なのはにお弁当届けてくれないかしら？あの子ったら忘れたまま行っちゃって…」

そう言った桃子は悟空に弁当箱を渡した。

「おう、わかった！えーと、なのはの気は……あっちか！」

シュン！

「き…消えた…！？」

悟空は瞬間移動を使ったのだった。

悟空にしてみれば何気ないことだが、桃子は腰を抜かしていた。

*

なのは（はぁ…お弁当忘れちゃった…）

授業中、弁当を忘れたなのはは落ち込んでいた。

授業の内容など耳に入っていないだろう。

そこへ……、

シュン！

「オッスなのは！桃子さんがこれ届けてくれって！」

突然、なのはの机の前にガタイのいい男、悟空が現れた。

それと同時に教室がシンと静まり返った。

「じ、悟空さん！？」

当然ながらなのはは驚いている。

「じゃ、またな！」

シュン！

なのはに弁当箱を渡すと悟空は消えた。

「た…高町さん、今の人は…」

「あ、えーと…私の知り合いのマジシャンです！みんなを驚かすのが好きなんですよ！」

「…いやマジックにしては凄すぎないかい？」

「はい！凄いですよ！」

なんとか誤魔化したのは。

この後、悟空は帰宅したなのはに怒られるのだが、それはまた別の話。

*

「はあ…何処にもいねえな…」

午後、ヴィータは街を飛び回っていた。

「リンディ提督に、他に闇の欠片を吸収した者を捜してくれって頼まれたけど……」

だが……、

「おい、その小娘…」

突如、何者かがヴィータに声をかけてきた。

ヴィータが振り向くと、そこにはセミのような姿をした怪物がいた。

「ああ？なんだテメーは？どう見たって人間じゃねえな」

「私の名はセル。地獄から生き返ったのはいいが、第一形態まで戻ってしまっただけ。完全体になるために、強い気を持つ人間を吸収し

ようとしていたところだ」

「…まさかあたしを吸収するってか？」

「その通りだ!!」

そう叫んだセルはヴィータに襲い掛かる。

「くっ、アイゼン！」

グラーフアイゼンで攻撃を防ぐヴィータだが、その反動でビルに叩きつけられてしまう。

「ぐっ…！」

「今だ！太陽拳!!」

太陽拳はヴィータの視界を一気に奪い去った。

「うわっ！眩し…！」

ヴィータが目を押さえている隙に、セルは彼女に近づく。

「では吸収させてもらうぞ。この街の人間は、ほとんど吸収してしまったからな」

「やめろオ！気持ち悪いんだよ!!」

ヴィータは必死で抵抗するが、頭以外をセルに吸収されてしまっていた。

「はやて…ベジータ……」

そう呟いたのを最後に、ヴィータは完全に吸収されてしまった。

「ふははは！いいぞ！この調子だ！」

ヴィータを吸収したセルは第二形態へと変身した。

*

午後6時、

（ん？ヴィータの気が消えた…何かが起こっているのか？）

「ヴィータ遅いな。何してるんやろ？」

「確かに遅いですね。私、捜してきます」

そう言い、シャマルが家を出ようとした時だった。

「待て。俺が行く」

ベジータがシャマルの肩に手を置く。

「え？いいんですか？」

「ついさっきヴィータの気が消えた。俺が行って確かめてくる」

ベジータは外に出ると気を開放し、飛び立った。

「ちくしょう…嫌な予感がするぜ！」

*

ヴィータの反応がロストしたことをアースラも確認していた。

「クロノ！直ちに武装局員を率いてヴィータの搜索を！」

「了解！」

*

アースラから出撃したクロノ率いる武装隊が目にしたのは壮絶な光景だった。

「こ…これは…！」

なんとセミのような怪物…セルが尻尾で街の人々を吸収しているのだ。

「ん？」

セルもクロノ達に気づいたようだ。

「なんだ貴様らは？」

「僕は時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。君を大量虐殺の罪で逮捕する！」

武装局員達がセルを囲む。

「ふん、雑魚め。ぶるうあああ！！」

ドシュン！

セルは気を開放し、クロノ達を吹き飛ばした。

「くっ！こいつ！」

クロノがセルに特攻をかける。

「かめはめ波！！」

ドオン！！

「ぐはあッ！？」

かめはめ波をもろにくらったクロノは地面に叩きつけられ、吐血した。

「クロノ執務官！」

「余所見してていいのか？太陽拳！！」

ピカアッ!!

「ぐわぁ!?!」

「こ、これは!?!」

局員達の目を眩ませたセルは、隙だらけの局員達を次々と吸収していった。

「はははは!またパワーアップしたぞオー!?!」

そしてセルは、地面に倒れているクロノに目をやる。

「貴様もさつき吸収した、赤髪の小娘と同じくらいの気を持っているな。貴様を吸収し、完全体になってやるわ!」

「…なん…だと…ヴィータを吸収したのは…お前か!」

「そうよオ!ぶるうあああ!?!」

セルがクロノに向かってくる。

(やられる…!)

クロノが目を瞑った、その時だった。

「ギャリック砲ー!?!」

ドオオオオン！！

「ヴェエ！？」

何処からかギャリック砲をぶつけられたセルは地面に叩きつけられる。

「！？…いったい何が…はっ！」

クロノはビルの上を見て驚いていた。

「ベジータ！」

ビルの上ではベジータが仁王立ちしていた。

「ベジータか！」

「何かおかしいと思って来てみれば、まさか貴様の仕業だったとはな！セル！！！」

セルはベジータの正面まで上がってきた。

「ベジータ、今の私は第二形態だが、貴様を捻り潰すくらいの力があるぞ！」

「闇の欠片か…ふざけた野郎だ！ぶっ殺してやる！！」

ドシュン！

ベジータは超サイヤ人となり、セルに殴りかかった。

「でやあああー!!」

ドガッ!!

「ぶるうあああー!!」

セルの顔面を殴りつけたベジータは、セルから少し離れ、距離をとった。

「これでもくらいやがれえー!!」

ベジータはセルに対し、エネルギー弾を乱射した。

「はあ…はあ…やったか？」

「遅い!!」

「なっ!?!」

突如後ろから聞こえた声に驚き、振り向くベジータだが遅かった。

「魔貫光殺砲!!」

ズシャッ!!

「ぐはぁッ!？」

セルの放った魔貫光殺砲はベジータの腹部を貫いた。

ベジータは血を流し、クロノの横に墜落した。

「ベジータ! しっかりするんだ! …… はっ!」

セルも二人の前に着地する。

「無様だなベジータ。管理局とやらと手を組んだつもりらしいが、まだまだ私には勝てまいな」

セルは二人を見下ろし、嘲笑う。

対するベジータとクロノは傷口を押さえ、セルを睨みつける。

「ぐ… 逃げるクロノ!」

ベジータはクロノの前に立ち、かまえをとる。

「ビ… ビッグバン…」

「遅い。デスビーム！」

ズキユン！

「ぐああああー！」

セルのデスビームに貫かれたベジータの右膝から血が吹き出した。
超サイヤ人から黒髪に戻り、ベジータはうつ伏せに倒れ込む。

「ベジータ、しばらく眠ってもらっぞ」

ドガッ！

「ぐはあッ！」

セルに腹部を蹴られ、ベジータは意識を失った。

「べ、ベジータ！おい！…ぐっ！」

クロノの胸倉を掴んだセルは、自らの尻尾を向ける。

「では吸収させてもらっぞ！ハハハハハ！」

みるみるうちにクロノが吸収されていく。

(…フェイト、なのは…後は頼んだぞ…！)

クロノは二人の少女にセル打倒を託したと同時に意識を失った。

*

アースラにて、

「クロノ君！クロノ君！？」

「どうしたの！？」

「艦長…クロノ君達の反応が……」

*

「ベジータもヴィータも遅いな。帰ってきたら叱らなあかな」

「…やっぱり心配です。私そこまで…」

ピンポン！

シャマルが家を飛び出そうとした時、インターホンが鳴った。

「はい！」

シャルは玄関のドアを開けた。

「はい。あ、なのはちゃん」

そこにいたのはなのはだった。

だがなのはは後ろを向くなり、声をあげた。

「悟空さん！早く！」

「おう！」

なのはの後ろから現れた悟空は玄関に駆け込む。

「わりいけど入らせてくれ！」

「ええと…あつ！？」

悟空の背負っているものを見たシャルは息を飲んだ。

「ベ…ジータさん…？いやあつ！ベジータさあん！！」

「どうしたのだ！？」

「何事か！？」

すぐさまシグナムとザフィーラも駆けつける。

「…べ、ベジータ！それに貴様、誰だ！？」

シグナムは悟空を睨みつける。

「今はベジータさんをなんとかしないと！早く入れてください！」

「そうでした！とにかく入ってください！」

*

とりあえず悟空はシャマルに案内され、ベジータを運び込んだ。

血塗れのベジータを目の当たりにしたはやては当然ながら青ざめた。

「ベジータ！しっかりしてやー！」

「……ふう、とりあえず傷口はふさぎました。命に別状はありません」

治療を終えたシャマルがため息をつく。

「ですが、あとはベジータさん本人の気力次第です…」

「そういえば貴様は何者なのだ？」

シグナムは悟空に目をやる。

どうやら守護騎士達は悟空と面識がないらしい。

「この人は孫悟空さん。ベジータさんと同じ世界の人で、ベジータさんのお仲間なんです。今は私の家で一緒に暮らしているんです」

「オッス！オラ悟空！実はよ、リンディに頼まれて闇の欠片を持った奴をなのとは一緒に捜している途中でベジータを見つけたんだ。んでなのはベジータの住んでる場所知ってるみたいだったから、ここまで運んできたんだ」

悟空は経緯を説明し、守護騎士達の誤解をといた。

「そうだったのか…それはすまない」

「気にすんなよ！」

ザフィーラに笑いかけた悟空はベジータの顔を覗き込む。

「すまねえベジータ、オラ仙豆持ってねえんだ」

その時、

「…カ…カ…ロット……？」

悟空の声に反応したのか、ベジータの意識が戻った。

「…ベジータ（さん）！」「」

皆が一斉にベジータの方を向く。

「…よく聞け、カカロット…奴が…セルが居やがった…！」

「な…セルだって!？」

「ああ…あと…ヴィータとクロノが…奴に吸収された……」

「ええっ!？」

「本当なのかベジータ!？」

驚く一同。

「…おそらく奴は…もう完全体になっていやがるだろうぜ……なあ、カカロット……」

「…ん？」

「…はやて達を…頼んだぞ」

そう言い残し、ベジータは意識を失った。

「…ベジータ!」

はやては涙を浮かべ、ベジータに呼び掛けるがベジータは目を覚ま
さなかった。

「はやて…だっけ？サンキューな、ベジータのこと心配してくれて
……はっ？」

何かを察知した悟空は立ち上がった。

「…悟空さん、どないしたん？」

「な…なんだ？物凄えでけえ気が、こっちに近づいてくつぞ！」

「なんだと！？」

大きな気の正体を確かめるべく、悟空は家を飛び出す。

家の前にいたのは…、

「ホッホッホ、久しぶりですね。孫悟空」

「な…フリーザ！なんでおめえが…！？」

「ホッホッホ！簡単なことです。地獄から復活したんですよ！」

不敵に笑うフリーザ。

「そうかぁ…セルも生き返ったんだしな…でも前より気がでかくなってるねえか？」

「闇の欠片を吸収したら、こんなにパワーアップしましてね！さあ、恐怖の殺戮ショーを始めましょうか…！」

悟空は焦りの表情を浮かべる。

「悟空さん！その人は…！？」

悟空の後ろから、はやて達が顔を出している。

「こいつはオラがやる。おめえ達は他に闇の欠片を持ってる奴を捜してくれ！」

「ホッホッホ！そんな事する必要はありませんよ。何故ならザーボンさんが他の魔導師を誘き出すために、今頃街で暴れているでしょうからね」

「な、なんだって！？」

*

同時刻、

「…なんて多さだ…！」

市街地上空にて、フェイトとアルフは謎の敵と交戦していた。

その敵とは勿論、フリーザの部下達である。

「ひいやああ…！」

「ぐっ…！」

「…しまった！」

グルドの金縛りにより、二人は動きを封じられてしまう。

「よくやったぞグルド！リクームパンチ！！」

リクームが拳を振り上げ、フェイトに殴りかかった。

「やられる…！」

ズシャツ！！

「ぐおおお！？」

ドガアアアン！！

「…え？」

突如目の前で爆発したリクームに驚くアルフ。

「今の技…シグナム！？」

フェイトの視線の先には、シュツルムファルケンを放ったシグナム、その周りになのは、はやて、ザフィーラの姿があった。

「デイベインバスター！！」

ドオオオオ！！

「ぎゃああああ！！」

ドガアアアン！！

グルドの死により、フェイトとアルフは金縛りから解放された。

「ありがとう、みんな！」

「話は後だ。まずはこいつらを片づけるぞ！」

こうして、魔導師達の戦いが始まった。

激闘！管理局vsフリーザー味

「アクセルシューター！シュート！」

「クラッシュャーボール！」

ジースは射撃戦の中、なのはとの距離を縮めていく。

戦局は戦い慣れしているジースが有利だ。

「へへ！貴様ら魔導師ごときが、俺達ギニュー特戦隊にかなうものかよ！」

ジースはなのはの右腕を掴み、有り得ない方向へ曲げていく。

「い、痛い…！」

「なのはを放して！ハーケンセイバー！」

フェイトが放ったハーケンセイバーが、まっすぐジースに向かっていく。

「今だよなのは！早くそいつに攻撃して！」

「…！…しまった…！」

そう、フェイトがハーケンセイバーを放ったのは、ジースの注意を逸らすためだった。

「ええいッ！」

ドガッ！

「ぐああー!!」

レイジングハートでジースの頭を殴りつけ、ジースとの距離をとる
なのは。

「デイベイン…」

なのははレイジングハートをジースに向け、エネルギーを蓄積する。

「…ぐっ、この野郎あー!!」

「させない！」

フェイトは急いでジースにバインドをかける。

「な、なにッ!？」

「バスターー!!」

ドオオオオ!!

「…あ…があああ!!」

ドガアアアン!!

身動きのとれぬまま、ジースはデイベインバスターの中に消えた。

「やったね、なのは!」

「うん! フェイトちゃん! これも悟空さんのおかげだね!」

ジースを倒した二人はハイタッチする。

二人は短期間とはいえ、アースラで悟空と模擬戦をしていたため、戦闘力が大幅に上がっていたのだ。

「…ごめんフェイトちゃん。私、悟空さんのところに行ってくる!」

そう言ったのはフェイトに背を向け、悟空のもとへ急いだ。

*

「はあッ!」

ザーボンはシグナムを追撃する。

だが彼の攻撃は、すべて避けられるか受け止められてしまう。

「…ええい、何故当たらん!？」

ザーボンは焦りを隠せない。

「私は、お前のような邪気をもつ者に負けはしない」

「こうなってしまったからには仕方あるまい。私の真の力を見せてやろう」

シグナムを睨みつけ、ザーボンは不敵に笑った。

（この男…何を考えている…？）

困惑するシグナムを余所に、ザーボンの筋肉は徐々に膨らんでいく。

「ふふふ…」

ボンッ！！

「なっ！？」

醜い姿に変身を遂げたザーボンを目の当たりにし、驚愕するシグナム。

「グハハハハ！変身したのは姿だけではない！攻撃力もスピードも、先程とは比べ物にはならんぞ！」

そう言い放ったザーボンはシグナムに突進した。

「ぐっ！」

レヴァンティンで受け止めたシグナムだが、明らかに上昇した攻撃力にふらついてしまう。

そしてザーボンはシグナムに連続パンチを繰り出す。

だがシグナムはここで、ザーボンの足元が隙だらけであることに気づいた。

「…やあッ！」

ドガッ！

「うおッ！？」

シグナムはザーボンの足を蹴り、転倒させることに成功した。

「足元がお留守のようだな」

「こいつめえッ…！」

ザーボンはフラフラと立ち上がる。

「…空牙！」

ズシャッ！

空牙はザーボンの腹部を切り裂いた。

「うぐっ！ぐおお…！」

ザーボンは傷口を押さえ、膝をついてしまつ。

「今だ、飛竜一閃…！」

「ぬ…うわああ…！」

ドガアアアン…！

*

一方、八神家に残った悟空とシャマルは上空でフリーザと戦っていた。

「覚悟しろ猿野郎…！」

ビュウウウ…！

突如フリーザの前に小さな竜巻のような風が出現した。

その風はフリーザに直撃し、彼を怯ませた。

「な、なんだ今のは…あいつかぁッ!!」

辺りを見回すフリーザが見つけたのは、悟空の少し後ろにいるシャルだった。

「今です悟空さん!!」

「くらえフリーザ!!」

悟空は高速移動でフリーザの真後ろへ回り込み、フリーザの脳天に拳を叩き込んだ。

「グギヤアアア!!」

頭をかかえ、悟空とシャルを睨みつけるフリーザ。

「ふ…ふざけやがってえー!!!!」

そう叫んだフリーザは悟空に突進した。

だが彼が悟空に衝突することはなかった。

「な…なののか?」

なんとジースを片づけ、駆けつけたのはがバリアを張り、フリーザの突進を阻止したのだ。

「すみません悟空さん！今からレイジングハートに魔力を溜めるのでしばらくあの人を引きつけてください！」

「おう、わかった！」

なのはに手を振った悟空は超サイヤ人となり、すぐさまフリーザに向かっていく。

そして30秒後…

「…全力全開！スターライト…ブレイカー…！」

レイジングハートから放たれたスターライトブレイカーは、まっすぐフリーザへと向かっていく。

フリーザと殴り合っていた悟空はすぐさま回避する。

「な…こんなもの！」

両手でスターライトブレイカーを受け止めるフリーザ。

「早く降参してください！」

「デカイ口を叩くのもそこまでだ！今すぐ黙らせてやるぞ…！」

そう叫んだフリーザはスターライトブレイカーを押し返す。

「くっ…！」

なのはが圧倒されている。

その時、なのはの隣に悟空がやってきた。

「う…悟空さん！」

悟空はレイジングハートに手を添える。

「なのは、オラがこいつに気を送る。魔力みてえにはいかねえかもしれねえが、やってみなきゃわかんねえ！おめえはまっすぐ奴に攻撃を当てるんだ！」

「は、はい！」

悟空の加勢により、なのはのスターライトブレイカーは安定を取り戻したが、フリーザを倒すには到らない。

「こうなったら仕方ねえ！二人同時にフルパワーだ！！」

「はい…！」

「スターライト…かめはめ波…！！！！！！！！」

ドオオオオ！！

「な…なにッ!？」

スターライトかめはめ波は一瞬にしてフリーザを飲み込んだ。

「グギヤアアア!！」

ドガアアアン!!

フリーザは跡形もなく消滅し、悟空となのはは勝利を掴んだ。

「やったぞなのは!」

「はい!悟空さん!」

顔を見合わせて笑う二人。

「凄い…二人とも凄いです!」

さっきまで空気だったシャルルが拍手する。

「あっ!」

街を指さすシャルル。

指さした先の街からは、フリーザの部下達を倒した魔導師達や守護騎士達が戻ってきていた。

はやてはラグナロクでバータを消し去り、ザフィーラとアルフは挟み撃ちでドドリアを倒したようだ。

「孫、大丈夫か？」

「オラ達は大丈夫だ。それよりもオラが貸した気はちゃんと使えたか？」

そう、シグナム達がフリーザ軍の幹部達と互角に戦えたのは、悟空が皆に気を貸し与えていたからだ。

「ああ。ベジータから気の使い方を教わっていなかったら、おそらく負けていただろうな。それより、孫は大丈夫か？我らに気を与えても弱体化しないのか？」

悟空の心配をするザフィーラ。

「……！……だから、オラいつもならもつと速く動けんだけどなあ」

「え！？今のよりもつと速く動けるんですか！？」

驚くのはをよそに、悟空は辺りを見回し、ため息をついた。

「……よし、もう強え気は感じねえ！全部ぶっ倒したぞ！」

「果たしてそうかしら？」

シュン！

その時、皆の前に黒い服を着た一人の女が現れた。

「はッ…！？」

その女を見たフェイトは青ざめた。

「か…母さん…！」

そう、かつてねジュエルシード事件の首謀者、プレシア・テストロツサだったのだ。

「テストロツサの母親か…だがお前は既に亡くなっているのではないのか？」

「そうよ。そして地獄に落ちたわ。でもね、そこでとても頼もしい使い魔を見つけたの…出てきなさい、セル！」

シュン！

「なっ…セル！」

プレシアの隣にセルが現れる。

「久しぶりだな、孫悟空」

「まさかとは思ってたが、おめえ完全体になってたか…」

「間抜けな魔導師共を吸収できたおかげで、普通の人間を吸収する手間が省けたつてもものよ！」

そう言ったセルは薄ら笑いを浮かべた。

「…それにしてもおめえ、人造人間なしでよく完全体になれたな…？」

「プレシアの作ったドリンクで、普通に大きな気を持つ人間を吸収しても完全体になれるようになったというわけだ！」

悟空に説明するセルだが、悟空にはもう一つ気になることがあった。

「そもそも…おめえらやフリーザ達はなんで生き返ったんだ？」

「プレシアの魔術のおかげよ！閻魔大王の持つ閻魔帳から私達の名を消したのだよ！」

「閻魔のおっちゃんもドジだな…」

そう呟いた悟空はセルとプレシアを睨みつける。

「それでだ孫悟空。あと二日後にここ海鳴市で、久々のセルゲームをしようと思うのだ」

「ふざけんじゃねえ！おめえ、また罪のねえ人々を殺すつもりだろ…！」

「わかったわかった、ならあの海岸なんてどうだ？」

セルの指さした先の海岸は立ち入り禁止場所なため、人が入り込めない場所だった。

「…ああ」

どうやら話がついたようだ。

「…セル、私は先に戻るわ。早くドラゴンボールを使えるようになさい…」

シュン！

「あ…か、母さん！」

動揺するフェイト。

「おっと、お喋りが過ぎたようだな。ではそろそろ失礼しよう」

シュン！

「ま、待て！」

《二日後、楽しみにしているぞ…！》

取り残された悟空達の耳に、セルの声が響いた。

作戦会議

悟空達はプレシアとセルの二人と接触した後、アースラに集まっていた。

「まさかプレシア・テストロッサが事件に絡んでいるなんて…」

「リンディ提督、はやて。ごめんなさい…私の母さんのせいでクロノとヴィータが…」

そう言ったフェイトが俯く。

「何言ってるの、フェイトさんのせいじゃないわ」

「そうやって、誰もフェイトちゃんを責めへんよ」

「そうだぞ。それに、おめえの母ちゃんが居なくてもセルやフリーザはとんでもねえ奴なんだぞ」

リンディとはやて、悟空がフェイトを慰める。

「悟空さん、貴方はもとの世界でそのセルと戦ったことがあるんですね？その時のことを教えてください」

リンディが悟空の目をジッと見る。

「おう。でもセルを倒したのはオラじゃなくて、息子の悟飯だからよ」

「え？つてことは…悟空さんはセルと戦ってないのですか？」

「いや戦ってただけだよ、オラ途中で死んじまったから最後まで戦えなかったんだ、ハハ！」

…とても笑い事ではない。

「…そ、それでベジータさんの傷は…」

リンディがベジータの話題に触れた瞬間、はやてと守護騎士達が俯いた。

「…はい、命に別状はないんですが…到底セルゲームに間に合いそうには…」

シャマルが説明する。

「え、ベジータに何かあったの！？」

事情を知らないフェイトとアルフがシャマルの方へ身を乗り出す。

「実はね…」

*

「そんな…セルがベジータを………」

なのはから事情を聞いたフェイトは頭をかかえる。

「テストロッサ、自分を責めるな」

シグナムがフェイトの肩に手を置くが、彼女も内心プレシアには頭にきていた。

「…ではセルゲームまでの間、悟空さんに皆の指導をお願いしようと思います。…よろしいですか？」

話を戻したリンディは悟空の方を向く。

「おう、いいぞ！でもな…」

「はい？」

「…オラ腹減っちゃった！修行の前に飯食わしてくれ！」

だが食事を終えた悟空はこの後、満腹になり眠くなったため高町家に帰ってしまった。

ということで翌日、悟空による最後の特訓が行われることになった。

*

翌日、アースラのトレーニングルームにて悟空は皆に気の使い方を指導していた。

「おめえらには昨日よりもっと気を付けてやった。魔力と両立できるようにする特訓だ」

「はい！！」

そして全員が気を開放し、悟空も超サイヤ人2になる。

「おめえら！全員でオラにかかってこい！」

「「「うおおーッ！！」」」

全員で向かっていったが、悟空は一瞬で彼等を吹き飛ばしてしまう。

「どうした！もう終わりか！？そんなんじゃセルには勝てねえぞ！」

*

「悟空さん…凄いですね…」

「そりゃあ、ベジータさんと同じ世界の人だものね」

エイミーとリンディは、アースラの艦橋でトレーニングルームの様子をモニター越しに見ていた。

「正直言って、ベジータさんが居ないとキツイわね…悟空さんだけ

でもギリギリなのに…」

そう呟いたリンディはため息をつく。

（クロノ君……きっと悟空さんやなのはちゃんが助けてくれるからね…！）

*

一方、

「どういふことなのセル！私達が生き返った経緯をあいづらにわざわざ説明するなんて…！」

「別に構わないだろう。それを知ったところで奴らにはどうしようもない。…どうした？笑えよ、プレシア」

そう言うセルだが、プレシアは顔をしかめたままだ。

「はぁ……それで、ドラゴンボールは…？」

「それは私がすべて隠しておいた。主人である貴様の望みを叶えるためにな…」

そう言ったセルはニヤリと笑う。

「フフ…地獄で暴れていただけのことはあるわ…フフフフ…！」

プレシアは不敵に笑うと、その場から姿を消した。

「…ふん、愚かな女だ…」

*

その夜、皆はそれぞれの自宅に戻り、明日に備えることにした。

「フェイトさん、自分を責めては駄目。そして自分を信じてね」

「…はい！」

「明日は負けられない戦いになるね！」

「…そうだね。頑張ろう」

フェイトは子犬フォルムのアルフに笑いかけた。

*

高町家にて、

「ユーノ君…私達、勝てるかな？」

「わからない…けど悟空さんはいつも通りだね」

悟空はなのはの部屋の漫画を読み、爆笑していた。

「ははっ、これおもしれえな〜！亀仙人のじっちゃんやクリリンが好きそうだぞ！」

「全然緊張感がないの…」

「うん…」

*

そして八神家。

はやて達の帰宅後、ベジータの意識が戻ったようだ。

「…そうか…明日セルゲームを…」

「ああ…ベジータよ。お前の怪我、なんとかならんのか？」

問いかけるザフィーラ。

「わからん…明日までにはなんとかしたいが…」

シヤマルによると、もうじき全快らしい。

「…ん？どうしたはやて？」

ベジータは、先ほどからはやてが小刻みに震えているのに気付いた。

「ベジータ…なんか私、嫌な予感しかせえへん。あのセル…とんでもない化け物や。もしかしたら…私ら、全員負けて殺されてまうんかな？」

「馬鹿野郎！はやて、お前はいつからそんな弱音を吐くような奴になっただ？そんな事は負けてから考えるんだな！」

ベジータが大声を出したため、家の中が静まり返る。

「す…すまん、そうだな…絶対に負けないために戦えればそれでいい。カカロットのようにな…」

「うん…グスッ…ありがとうな、ベジータ…」

自分を励ましてくれるベジータに感動し、はやては涙を流した。

「…泣くな、さっさと寝ろ」

「…グスッ…うん、わかった。ほな皆寝よか」

はやての言葉に頷く三人。

「はい、主はやて。ベジータ、早く傷を治してくれ。また一緒に修行したいからな」

「我もだ」

そしてシャマルもベジータの方を向く。

「そうですね、また荷物持ってもらわないと！」

「ほんまやな、シャマル！」

「なっ…き、貴様ら！俺を便利屋だと思っているのか！？馬鹿にしゃがってええ…！！」

頬を赤らめながら怒るベジータを見て、四人は更に笑いが止まらなくなった。

「笑うな！さっさと寝やがれ！」

「ふふっ、はい！」

そしてはやて達は各自の寝室に入ってしまった。

「はやて…生きて帰ってこいよ。シグナム、シャマル、ザフィール。お前達もだ…」

時計の針は12時をさしている。

ベジータは誰も居ないリビングで一人、そう呟いた。

恐怖のセルゲーム

翌朝、午前8時

「ベジータ…しっかり休むんよ…」

今朝、ベジータは再び意識を失った。

だがシャマル曰く、それは回復の前兆らしい。

はやて、シグナム、シャマル、ザフィーラはベジータの身を案じ、自宅を後にした。

*

決戦の舞台である海岸には、既になのは、フェイト、アルフ、ユーノ、悟空が到着していた。

「ねえ悟空、あんた達の世界でのセルゲームもこんな感じだったの？」

アルフが悟空に尋ねる。

「どうかな、今回はベジータもピッコロも悟飯も居ねえし…オラ達で頑張るしかねえな！」

「そうだね…！」

「はい！」

頷くフェイトとユーノ。

「あ、はやてちゃん達！」

なのはが指さした先には、はやてとそれに続く守護騎士三人がこちらへ向かってきていた。

「ごめんな悟空さん、まだベジータは…」

到着するなり、悟空に謝るはやて。

「はやてのせいじゃねえぞ。それにベジータの面倒見てくれてサンキューな！」

悟空がはやてに笑いかける。

「孫、奴らは…？」

「セルの気もプレシアの気も感じねえ……あいつらまだ来てねえな」

「それはどうかしら？」

「」「！」「？」「」

全員が振り向くと、セルを従えたプレシアがいつの間にか立っていた。

「さあセル！さっさとこいつらを片づけなさい！そしてドラゴンボールを使えるようにするのよ！」

「待つて母さん！」

プレシアは声をかけてきたフェイトを睨みつける。

「この世界には、ドラゴンボールなんてもの存在しないよ！」

「バカな子ね…何言ってるんだか」

プレシアはフェイトを嘲笑う。

「バカはおめえだプレシア！本当にドラゴンボールはねえんだ！」

悟空が必死に呼びかけるが、プレシアは聞く耳を持たない。

「ドラゴンボールはもうとくにセルが隠しているのよ！残念だったわね！」

「ああ、残念だったなプレシア」

今のセルの一言に、プレシアは凍りつく。

「な…何言ってるのセル…だってあなた…」

プレシアは動揺を隠せない。

「全ては孫悟空とお前の娘の言う通りだ。この世界にドラゴンボールなどない！」

真実を告げられたプレシアはセルを睨みつける。

「…騙したのね…！」

「そうだ。私は生き返ればそれでよかったんだ…！」

そう叫んだセルはプレシアを蹴飛ばし、転倒させる。

「母さん！」

「さらばだプレシア…！」

不敵に笑うセルはプレシアにエネルギー弾を撃ち込んだ。

（そんな……もう一度…アリシアを生き返らせることができると思ったのに…）

自らの死を悟ったプレシアが涙を流す。

「…アリ…シア…」

ドガアアアン…！

愛しの娘の名を呟き、プレシアは爆死してしまった。

「セル！なににも殺すこたあねえだろ！！」

悟空達全員がセルを睨みつける。

「邪魔な奴を始末しただけだ。何が悪い？」

「ゆ…許せねえ！うああー！ツ！！」

ドシン！！

怒った悟空は気を開放し、超サイヤ人2へとなった。

続いてなのは達もバリアジャケット姿に変身し、気を開放する。

「ふん、何をしようが私には勝てん！いけセルジュニア達！！」

なんとセルの尻尾からセルジュニアが八体も現れた。

「孫悟空以外を狙え。殺してもかまわんぞ」

セルの指示を合図に、セルジュニア達が魔導師達の方へ向かってくる。

「アクセルシューター！シュート！」

「ファイヤー！」

なのは達は次々と攻撃するが、セルジュニアは軽く避けてしまう。
しまいには掴みかかれ、一方的に殴られてしまう。

「はぁッ！」

「このぉッ！」

シグナムとザフィーラだけはセルジュニアと互角に戦っているが、
表情に余裕がない。

「かゝめゝはゝめゝ…」

両手に気を集中させる悟空。

「波ぁーッ！！」

ゴオオオオ！！

悟空のかめはめ波はセルの右腕を吹き飛ばしたが…

「ふん……へぶるぁー！！」

なんと今吹き飛ばされた右腕が復活したのだ。

「この私がピッコロの血をひいていることを忘れたか？」

（セルの野郎：闇の欠片の影響で、間違いなく魔人ブウより強くな
ってやがる！それにオラはなのは達に気を分け与えてるから超サイ
ヤ人3にはなれねえし、そのなのは達の気も小さくなってきてる…
このままじゃまずいぞ！どうする！？）

一方、はやてはセルジュニアの攻撃をかいくぐり、セルに迫ってい
た。

「悟空さんどいて！」

はやての声に反応した悟空は右へ飛び退く。

「クラウ・ソラス！」

だがセルははやての攻撃を弾き返した。

「邪魔だあッ！！」

バキッ！！

悟空への攻撃を妨害されたセルは怒り、はやてを殴り飛ばした。

「はやてちゃん！きゃっ！！」

なのは達もはやての援護に向かおうとするが、セルジュニアに妨害
される。

「まず貴様から消してやる！かゝめゝはゝめゝ…」

かめはめ波を放つ準備を終えたセルはニヤリと笑う。

「波ぁーッ！！」

ドオオオオオ！！

不敵に笑ったセルのかめはめ波が、はやて目掛けて放たれた。

「……ッ！？」

ドガアアアン！！

「主ははやてーッ！！」

「はやてちゃん！！」

「しまったーッ！！」

はやてのいた場所は煙が立ち込めている。

「ぬははははは！！孫悟空よ、どうだ？目の前で仲間を殺された感想は！？ふははははは！！」

「ここからは俺様に任せろ」

「まさか……」

「その声は……！」

やがて煙が晴れ、声の主の姿が現れる。

「ベジータ（さん）！！」

最終決戦！

「ベジータめ…生きていたのか!!」

「当たり前だセル！貴様如きに殺されてたまるか!!」

ベジータははやての正面に立っており、かめはめ波を防いだのだ。

「ベジータ！ありがとう！」

「ふん、気にするな」

そしてベジータはセルを睨みつける。

「セル！これ以上貴様の好きにはさせんぞ!!」

ドシュン！

そう言い放ったベジータは超サイヤ人2となる。

「ええいセルジュニアよ！魔導師共は後回しだ！ベジータと孫悟空をやれえ!!」

セルの声に反応したセルジュニア八体は、一斉にベジータへ向かつ

ていった。

「ふん、雑魚が！」

まずベジータは正面にいたセルジュニアの両腕を掴む。

「うりゃああーッ!!」

ズシャッ!!

ベジータはそのままセルジュニアの胴体を引き裂いた。

「まずは一匹！」

そして後ろを振り返り…

「ビッグバンアターック!!」

ドガアアアン!!

ビッグバンアタックは、ベジータの背後に迫っていたセルジュニアを二匹消し去った。

「ベジータどけえ！かめはめ波!!」

ドオオオオオ！！

悟空のかめはめ波もセルジュニアを二体飲み込んだ。

「な、なにイ！？」

さらに悟空は一気にセルジュニア三体にまわし蹴りをくらわせた。

その三体は腹部をおさえ、へたり込んでいる。

「今だなのは！撃て！」

「は、はい！スターライト…ブレイカー…！」

ドオオオオオ！！

なんとベジータと悟空がセルとセルジュニアを引きつけている隙に、
なのははスターライトブレイカーを放ったのだ。

ドガアアアン！！

スターライトブレイカーは残り三体のセルジュニアの葬った。

「な、セルジュニアが全滅だ！？ナメやがって…！」

セルは、スターライトブレイカーを放ったなのはを睨みつける。

「死ねえ！デスビーム！！」

ズキュン！

デスビームがなのはに迫る。

「あ……！！」

「なのは！どけええ！！」

デスビームに気づいた悟空は、なのはを押しつけた。

ズシュッ！

「ぐあッ！！」

なのはを庇った悟空は、セルのデスビームに貫かれた。

「悟空さん！！」

「カカロット！？」

悟空はそのままうつ伏せに倒れ込んだ。

「悟空さん！しっかりして悟空さん！」

「シャル！カカロットを頼む！」

「は、はい！」

悟空を治療すべく、シャルが駆け出す。

「させん！ギャリック砲！」

ドオオオオオ！！

セルがシャルにギャリック砲を放つが…

「ぐうッ！」

ユーノがバリアを張り、シャルを守る。

「チッ！」

ユーノの護衛が成功し、シャルが悟空のもとへ到着した。

「あたしも手伝うよ！」

アルフがユーノの右につく。

続いてザフィーラも左についた。

「ベジータ！シャマルと孫は任せろ！！」

「き、貴様ら…！すまん、感謝するぞ！！でやあー！！」

ベジータはセルに飛びかかり、拳を腹部に叩き込んだ。

「へぶるうあああ！？な…この私がベジータごときに…！」

「はっはっは！セル！俺やカカロットの細胞を持っている貴様が何を言っただがるんだ？忘れたとは言わせんぞ！俺達サイヤ人の特性を！！」

「サイヤ人の…特性？」

「ま…前、悟空さんに聞いたことがあるの！」

「サイヤ人は死の淵から蘇ったとき、圧倒的に戦闘力が増すんだあッ！！」

「ち…ちくしょう！あの時とどめを刺していれば…！」

セルが焦りの表情を浮かべる。

「もう遅い！さっさとヴィータとクロノを吐き出せえーッ！！」

ベジータは大きめのエネルギー弾を作り出し、セルの腹部にぶつけた。

「ぶべらあッ!!」

攻撃を受けた拍子に吹き飛ばされるセル。

「もうかまわん!!この地球もろとも貴様らを葬り去ってやる!!」

起き上がったセルは空に飛び上がり、かまえをとる。

「かああ……めええ……はああ……めええ……」

「ま……まさかあいつ……!」

すぐさま何かを悟ったベジータ。

「波————ッ!——!!」

ドオオオオオ!!

そう、セル編で悟飯に放った特大かめはめ波だ。

それをベジータに向けて放ったのだ。

「ふざけやがって！」

舌打ちしたベジータもかまえをとった。

「ファイナルフラッシュ！！」

ドオオオオオ！！

ベジータの必殺技、ファイナルフラッシュと特大かめはめ波がぶつかり合う。

だがベジータの方が圧倒されていた。

*

「俺は…」

ベジータは思い出していた。自分が初めて八神家にやってきた時のことを…

「俺は…!」

ヴィータ、シグナム、シャマル、ザフィーラとともに過ごした日々。

「俺はあッ!」

毎日見ていた、はやての笑顔。

「負けるわけにはいかんだああッ!…!…うおおー!…ッ!…!」

ゴオオオオオオオオオオオ!…!…!…!

ファイナルフラッシュの威力が増す。

「ふん！あいにくだが、今の私はフルパワーの半分も出していない。
ぶるうあああ！！」

ドシュン！

ゴオオオオ！！

かめはめ波の威力も増す。

「ま、まずい…！」

「デイベインバスター！」

ドオン！

「…ん！？」

セルが振り向くと、なんと後ろになのはが立っており、ディバインバスターを背中に命中させていた。

「チツ……なっ！？」

いつの間にかセルの周りには、なのは以外にフェイト、はやて、シグナム、ザフィーラが囲んでいた。

「サンダースマッシュャー！」

「クラウド・ソラス！」

「飛竜一閃！」

「うおおッ!!」

なのは、フェイト、はやて、シグナムは攻撃を放ち、ザフィーラはセルに殴りかかった。

「うるさいハエ共が!!」

ドシュン!

セルが気を開放し、五人を吹き飛ばした。

「きゃあッ!!」

「うわッ!!」

「ぐはあッ!!」

「ぐおッ!!」

「きゃあー!!」

五人は吹き飛ばされ、地面に倒れ込んだ。

「貴様ら…少ない気で無理しやがって…!」

とはいえベジータの体力もそろそろ限界だ。

「く、くそつたれえー!!」

だがそんな彼に近づく人影があった。

「ベジータ! 私も手伝う!」

声の主は、はやてだった。

セルに吹き飛ばされた後、ふらふらになりつつもベジータのもとへやってきたのだ。

はやてはベジータの横に立ち、ラグナロクをセルに放った。

「何してやがる！？逃げろはやて！貴様も死ぬぞ！！」

「嫌や！絶対に嫌や！！だって私ら……」

「……！？」

「私ら……家族やんか……」

「……は……はやて……！！」

「ふははははは！なにが家族だ！笑わせるな！！」

セルははやてを嘲笑う。

そんなセルをベジータは睨みつけた。

「黙れセル！俺は、はやての家族…八神家の一員だ！！」

そしてはやてと顔を見合わせる。

「はやて！俺達家族の力、見せつけてやるぞ！！」

「ベジータ…うん！」

「ふん、お遊びはここまでだ。フルパワーだあッ！！」

ゴオオオオオオオオオオオオ！！！！

「俺達が負けるものか！！」

「そっや！！」

少し離れたところでシグナムが皆に呼び掛けていた。

「ベジータと主はやてに気を与えるんだ！」

「はい！」「」

なのは達が手をベジータとはやてに向ける中、アルフがひとつのこ
とに気付いた。

「あれ…フェイトは……？」

皆の助けもあり、ベジータのファイナルフラッシュとはやてのラゲ
ナロクがフルパワーとなる。

「そんな傷だらけでそこまでの力を出せるとは…なかなかのものだ
が、そんな努力も無駄だ！今すぐ終わらせてやる！！」

だが…

「サンダースマッシュャー!!」

ズシュッ!!

「ぐおおッ!なにイ!？」

なんとセルの右腕を黄色い閃光が貫いた。

「はぁ…はぁ…はぁ…」

それはボロボロのフェイトが、最後の力を振り絞って放ったサンダースマッシュャーだった。

「あの雑魚め…まだウロウロしていたのか!!」

フェイトの必死の抵抗により、セルの注意がそれたのをベジータと
はやては見逃さなかった。

「今だ！はやて！！」

「うん！ベジータ！！」

「ラグナロク・ファイナルフラッシュ！！！！」

ドオオオオオ！！

「な…しまった！！」

迫るラグナロク・ファイナルフラッシュに焦るセルだが、もう遅い。

この勝負、少しでも油断した方が負けるのだ。

「そ…そんなぁッ…!!」

「うぉおーッ!」

「えーいッ!」

「ぶ、へぶるう ああああああ!」

ドガアアアン!!!

ベジータとはやての合体技により、セルは完全に消滅した。

「や…やったんか…？」

「奴の気は感じん。完全に消え去っただろう」

こうしてベジータ達は見事セルに勝利したが、肝心なことを忘れていた。

「……待てよ、セルが完全に消滅したってことは……ヴィータもクロノも死んだとおッ！？」

「…あ！」

「ふざけやがってえーッ！！」

事件解決

「いい！？参ったな、ここにはドラゴンボールねえしな…」

いつの間にか悟空が復活している。

シャマルの治療が終わったらしい。

そんな中、皆の目の前に小さなシャトルのような物が出現した。

「…なんだろう？」

その時、シャトルのハッチが開いた。

中から出てきたのは…

「ブ、ブルマ！？」

「ベジータ！あんた何処ほつつき歩いてたのよ！」

中から出てきたのは、ブルマ、悟飯、デンデだった。

「ベジータの…お母さん？」

「さあな」

首を傾げるフェイトとシグナム。

「おう悟飯！よく来たな！」

「お父さん、ドラゴンボール持ってきたんです！」

そう言う悟飯は七つのドラゴンボールを持っていた。

「さっそくシエンロンを呼びましょう！」

*

《願いは叶えてやったぞ。さらばだ!》

シュン!

デンドに呼び出されたシェンロンが消え、ベジータ達の前にヴィータとクロノ、他に吸収された武装局員や住人達が現れた。

「あ…!」

ヴィータはベジータの姿を見つけると、ベジータの方へ駆け寄ってきた。

「ベジータ!」

ヴィータがベジータに抱きつく。

「よく頑張ったな」

ヴィータの頭を撫でてやるベジータ。

「ところでブルマ、お前達の乗ってきたそいつは何だ?」

ベジータはシャトルを指さす。

「これ?これは次元転送装置って言ってね、あたしが開発したの」

*

翌日、ベジータと悟空はブルマの開発した次元転送装置でもとの世界に帰ることになった。

「…というわけだ。俺達はもとの世界へ帰る」

「そういつこった。じゃあなおめえら！」

ベジータ達の見送りに、なのは、フェイト、はやて、ヴィータ、シグナム、シャマル、ザフィーラ、ユーノ、アルフ、リンディ、エイミイ、クロノ、士郎、桃子、恭也、美由希が来ていた。

「時々、こつちの世界に戻ってこれないのか？」

「わからん。この装置の改良次第だが、何年かかるか…」

その時、はやてとヴィータが声をあげた。

「もう…二度とベジータや悟空さんに会われへんなんて嫌や…！」

「そうだ！悲しいこと言うんじゃないよ！」

「はやて…ヴィータ…」

ベジータは涙を流す二人に近づき、頭を撫でた。

「二度とじゃない。また会える。だから泣くな」

「悟空さん…ベジータさん…」

「なのは、今ベジータが言った通りだ。またいつか会えるかもしれねえぞ！」

そう言った悟空が装置に乗り込み、最後にベジータが乗り込む。

そしてハッチが閉じる直前、こう言った。

「これだけは覚えておけ。どんなに離れようが、俺達は家族だ！」

＊

月日は流れ、あれから十年が経過した。

「八神部隊長、その写真の人どなたですか？」

ティアナがはやての机に飾ってある写真立てを指さす。

「ああ、この人はベジータいうてな……まあ、私のお父さんみたいな人だな。なのは隊長やフェイト隊長よりも強いんだよ」

「どんな人だったんですか？」

スバルもベジータに興味を持ったようだ。

「そうやなあ…気難しいけど本当は優しくて、強くて誇り高い人やつたよ…」

「わたしも会ってみたいです！そのベジータさんに！」

笑顔のスバルにつられ、はやても笑顔になる。

「ふふつ、そうやなあ。私もいつかまた会えるって信じてるよ…」

なあ、ベジータ…

私ら…今でも一緒に居てるよ…

なのはちゃんも、フェイトちゃんも、ヴィータも、シグナムも、シヤマルも、ザフィーラも、クロノ君も…

せやから…いつでも来てな！

…待ってるで！

私らの…

…お父さん！

事件解決（後書き）

予告

俺様はサイヤ人の王子ベジータだ！

実はこの小説には続編があつてな、十年後…つまりStriker
sの世界が舞台だ。

この俺の活躍を見逃すんじゃないぞ！

閲覧ありがとうございます。そしてこれからもよろしく願います！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2107n/>

野菜王子リリカルベジータ

2011年2月5日10時44分発行